

OpenAI内部メモ流出：戦略転換か技術敗北か（詳細レポート）

1. 流出した内部メモの概要と「シャロットピート」の正体

2025年11月下旬、OpenAIのサム・アルトマンCEOによる社内メモがリークされ、同社が直面する最大の危機的状況が明るみに出ました^①。この内部メモはThe Information誌によって報じられ、その後多数のメディアで取り上げられています^②。メモの中でアルトマン氏は、Googleの最新AIモデル「Gemini 3」の台頭に言及し、「会社に一時的な経済的逆風があるかもしれない。当分は雰囲気良くないだろう」と社員に警告しています^③。実際、Gemini3は公開直後に世界最高性能のAIモデルとなり、アルトマン氏は「あらゆる面でグーグルは最近立派な成果を出している」と競合の進歩を率直に認めました^④。これは、長らく無敵と見られていたOpenAIの地位に亀裂が入りつつあることを示唆しています。この異例に率直なメッセージは、社員の不安と同時に透明性への評価も呼びましたが、「我々は無敵ではない」という認識は社内に大きな衝撃を与え、OpenAIを「デフォルトの勝者」から「戦時体制」へとマインドセットを転換させるきっかけになったと報じられています^⑤。

アルトマンCEOの内部メモは現状の問題点を診断するだけでなく、それに対抗する**新たな戦略**も概説していました。その核心として言及されたのが、「プロジェクト・シャロットピート」というコードネームの新モデル開発です^⑥。これは事前学習（モデルのプリトレーニング）段階で判明した欠陥に対処するために特別に設計された次世代の大型言語モデルであり、既存モデルの根本的弱点を克服する狙いがあります^⑥。奇妙なコードネーム「Shallotpeat（シャロットピート）」には象徴的な意味が込められており、エシャロット（玉ねぎの一種）は泥炭土（ピート）では育ちにくい＝**現在のモデル基盤（泥炭土）が理想的でない**ことを示唆しているといえます^⑥。つまりOpenAIは、自社のAIモデルに**表面的な微調整では解消できない根本的弱点がある**と内省しており、その弱点を是正すべく社運を賭けたモデル開発に乗り出したのです。

この「シャロットピート」開発計画は、OpenAIの**大規模な戦略的再編の一環**だとされています^⑦。アルトマン氏はメモの中で、たとえ一時的にOpenAIが不利な立場に陥っても「**非常に野心的な賭けに注力する必要**」があると強調しました^⑧。その「賭け」の一つとして挙げられたのが**AI研究の自動化**です。AIが自ら次のAIモデルの研究開発を行うというメタなアプローチで、新モデル開発サイクルを劇的に短縮することが狙いとされています^⑧。これは単なる効率化ではなく競争環境を根本から変える試みであり、**AIシステム自らが進化を加速できれば、巨額の資源を持つ既存プレイヤー（例：Google）の構造的優位を崩せる可能性**がある、と同メモは指摘しています^⑧。要するに、OpenAIは現在の逆風を一時的なものと捉え、将来の飛躍に向けて痛みを伴う戦略転換を図ろうとしているのです。

2. 「戦略転換」か「技術的敗北」か：スケーリング則の限界と技術的背景

今回の内部メモが示すOpenAIの方向転換は、AI研究における**スケーリング則の限界**と深い関わりがあります。従来、大規模なモデルにより大量データを学習させれば性能が向上するという「スケーリング法則」に業界の期待が集まっていました。しかし近年その手法は物理的・経済的な限界に近づきつつあると指摘されてきました^⑨。実際、GPT-4まで爆発的な性能向上を遂げてきたOpenAIも、**GPT-5の開発段階で既存のスケーリング最適化がもはや奏功しなくなった**ことを痛感します^⑩。社内では「モデルを大きくすれば精度が上がる」という従来手法が行き詰まりつつあるとの認識が広まり、これを受けてOpenAIは戦略の軌道修正を余儀なくされました^⑪。

具体的には、OpenAIはGPT-5の事前学習（プリトレーニング）予算をGPT-4.5比で大幅に削減し、その代わり**強化学習（RL）による集中的な後学習**で補うアプローチを取ったと伝えられています¹⁰。言い換えれば、学習段階でひたすらデータと計算資源を投下するよりも、**推論時にモデルがより長く「考える」ことで性能を底上げする方向**にかじを切ったのです⁹。実際、OpenAIは2025年に「推論重視のoシリーズモデル」を次々発表しており、ChatGPT向けの最新モデルである「OpenAI o3」や小型版「o4-mini」では、応答生成前に従来より長い思考チェーンを構築し、ツール使用まで含めて高度な推論を行えるよう訓練されています¹²。このように**推論時の思考プロセス拡張や大規模な強化学習**への注力によって、従来のプリトレーニング中心のスケール戦略の穴を埋めようとしたのです。

こうしたOpenAIの戦略転換は短期的には一定の成果を収めました。たとえば推論特化モデル「OpenAI o1」や「o3」は、数学やプログラミング、論理推論といった検証可能なタスクで従来より優れた成績を示しています¹³。しかしその一方で、この手法には**構造的な脆さ**も指摘されています。アップルの研究者らの調査によれば、問題に少し状況変更を加えるだけで推論チェーン型モデルの性能が極端に低下するケースが確認されており、汎用性に課題があるということです¹⁴。さらに、推論重視モデルは**計算コストが莫大**になる傾向があり、OpenAIの「o1」は同等の質問でGPT-4の数倍の計算資源を要するものの、ユーザーがその分多く費用を払ってくれるわけではないという経済的問題も露呈しています¹⁵。要するに、モデルの「考える力」を伸ばす代償として**経済効率や汎用性能の低下**という弊害が見え始めたのです。

その間、競合他社は別の角度からブレイクスルーを起こしました。Googleは2025年11月に投入した**Gemini 3**で、再びプリトレーニング（事前学習）による性能向上の可能性を実証してみせました⁹。一部では「もはやモデル巨大化による飛躍は望めない」との見方もあった中で、Google DeepMindのデミス・ハサビス氏は「**モデル世代交代による劇的な性能向上はなくなったが、事前学習への投資のROI（費用対効果）は依然非常に高い**」と指摘し、依然として基本に忠実な大規模学習が有効だと述べています¹⁶。事実、Gemini 3は学術ベンチマークでGPT-5.1を軒並み上回り、ある抽象的視覚推論テストでは**GPT-5.1の約2倍**という圧倒的スコアを記録しました¹⁷。この成果は、OpenAIが「スケールアップの終焉」を見越して推論重視に転じた戦略とは対照的に、**適切な手法を取れば事前学習による体系的な改善はまだ可能**であることを示しています¹⁸。言い換えれば、OpenAIが技術的に行き詰まりを感じて選んだ新路線は、**Googleに先んじられた結果論的には“賭けに敗れた”戦略**とも評価し得るのです。

実際、Xpert.Digitalの分析記事は、Gemini 3によってGoogleが技術的に追いついただけでなく重要分野で追い越した現状を踏まえ、「社内プロジェクト『Shallotpeat（シャロットピート）』に象徴されるOpenAIの**性急な戦略再編は、純粋な『推論モデル』へのこれまでの賭けが報われなかったことを認めている**と言え」と辛辣に指摘しています¹⁹。要するに、今回の内部メモが明かした急ピッチの戦略転換は、OpenAIにとって**スケールアップ路線の挫折という技術的敗北を示唆している面もある**のです。ただし同時に、これは次章で述べるように、将来を見据えたピボット（方針転換）でもあります。OpenAIは“一時的な後退”を受け容れてでも新アプローチに賭ける決断を下したのであり、悲観一辺倒ではなく「これから巻き返す」という意志がうかがえます²⁰。この賭けが成功すれば、再び技術リーダーの座を掴む可能性も残されているでしょう。

3. グーグルなど競合の躍進と「一時的な逆風」の要因

アルトマンCEOがメモで触れた「一時的な経済的逆風」の背景には、**2025年後半における競合他社の躍進**が大きく影響しています。中でも象徴的なのがGoogleです。前述のとおり、Googleの**Gemini 3**はリリース直後から主要ベンチマークでOpenAIのGPT-5.1を凌駕し、**ほぼすべての標準指標でOpenAIを上回る性能**を示しました²¹。これは「OpenAI自身がまだ開発途上にある能力をGoogleが既に実現してしまった」ことを意味し、OpenAIの長年の技術的優位が崩れつつある現実を突きつけました²²。アルトマン氏が社員に「短期的には雰囲気は良くない」と覚悟を促したのも、このGoogleの急伸が直接のきっかけでした³。彼は同メッセージで、Googleの最近の成果を称賛しつつ「**短期的な競争圧力の中でも集中力を維持しなければならない**」と訴え、ChatGPTが依然“AIの代名詞”であり続けるよう努力すると語ったと伝えられています⁴。

Googleの攻勢は性能面だけでなく**資本力とエコシステム**の面でもOpenAIに逆風をもたらしています。The Informationの報道によれば、Googleは今後数年間で**人間レベルのAI開発に1,000億ドル以上**を投じ、クラウドインフラにも数千億ドル規模で追加投資する計画だといいます²³。潤沢な広告収入や既存クラウド事業で年30兆円超の収益源を持つGoogleにとって、AIは必ずしも短期採算を求めずとも継続投資できる「戦略的投資」分野です²⁴。この強力な財務基盤により、Googleは当面利益を度外視してでもAI実験と実装を押し進める余力があります²⁴。さらに、**膨大なユーザー基盤への直接展開**という点でもGoogleは有利です。例えばGemini 3はリリースと同時にGoogle検索やGmail、Googleドキュメント等の主要サービス群に統合されました²⁵。ユーザーは特別な手続きをしなくても日常のデジタル活動の中で知らずにGeminiの恩恵を受ける状態です²⁶。対してOpenAIのChatGPTは独立したアプリ/サイトとして提供されており、ユーザーが自らアクセスして使ってもらう必要があります。**たとえGPT-5.1やAnthropicのClaudeなど一部指標で優れるモデルがあったとしても、Googleのモデルが数十億人の目に触れる環境にある**という事実は、市場支配力の点で決定的なアドバンテージとなります²⁶。こうしたGoogleの構造的優位性が、OpenAIにとって「逆風」と表現される所以です。

他の競合もそれぞれの戦略で台頭しつつあります。**Anthropic（アントロピック）**は、OpenAIの元研究者らが創業したスタートアップですが、2025年時点で評価額1,700億ドルに達し、Claudeシリーズなど独自モデルを武器に存在感を強めています²⁷。Anthropicは特に安全性や企業向け連携に注力しており、金融・ヘルスケア・サイバーセキュリティといった**高い信頼性が求められるニッチ市場**を開拓しているとされます²⁸。彼らは堅実な成長戦略を掲げており、**2028年までに損益分岐点に到達する計画（収支均衡）**を持つとも報じられています²⁹。実際、Anthropicは2023-2024年にかけてGoogleやAWSから巨額の出資・提携を受け、OpenAIに次ぐ第二極として企業顧客を着実に取り込んでいる状況です。Anthropicの戦略は「まず収益モデルを安定させる」ことであり、OpenAIとは対照的に**慎重かつ持続可能な路線**とみられています²⁹。投資家にとっては、将来巨額の赤字を出す恐れがあるOpenAIより、着実に収支バランスを目指すAnthropicの方が中長期で安心感があるとの指摘もあります³⁰。

Meta（旧Facebook）も別の角度から競争に寄与しています。Metaは最先端モデルの性能そのものではGoogleやOpenAIに劣るものの、**Llama（ラマ）**をはじめとする大規模言語モデルをオープンソースで次々公開し、開発者コミュニティにAI基盤を提供する戦略を取っています³¹²⁶。Llama 2やその後継モデルは研究用途や小規模サービスで幅広く使われ、AI能力の民主化に貢献しました。性能的にGPT-4/5やGeminiには及ばなくとも、「無料または安価で使える十分高性能なモデル」として普及したことで、**有料の専有モデルに対する代替選択肢**を市場に生み出しています²⁶。この結果、OpenAIや他の商用モデル提供者はAPI利用料金を引き下げざるを得なくなるなど、価格競争圧力が高まりました³¹。Meta自身は直接の収益よりも、自社のAI研究プレゼンス向上やAI人材採用にこのオープン戦略を活用しているようですが、OpenAI視点では「**下からの突き上げ**」による**市場コモディティ化**という脅威になっています³²。

このように2025年後半のAI業界は、**少数の巨大プレイヤー（OpenAI、Google、Anthropic、Microsoft、Metaなど）が覇を競う寡占市場**へ急速に収斂しつつあります³³。その中でOpenAIは、かつての「先行者優位で独走」という状況から一転し、**四方に強力な競合を抱える守勢**に立たされています³⁴。Googleの技術追撃と資本攻勢、AnthropicやMetaの差別化戦略、さらにMicrosoftも（パートナーである一方で）独自にCopilot製品群を各所に展開してユーザー囲い込みを進めています。こうした要因が重なり、アルトマン氏の言う「短期的な逆風」——すなわち**業界競争激化による成長減速の懸念**——が具体化しているのです。実際、内部メモでは「**2026年の楽観シナリオでも収益成長率は一桁台（5～10%）に鈍化し得る**」との予測が示されたと伝えられています³⁵³⁶。これは2025年に前年比数倍の急成長を遂げていたOpenAIにとって劇的な減速であり、同社のビジネスモデルの持続性に疑問符を投げかけるものです。

4. 「シャロットピート」と“困難な時代”が組織・資金・提携に与える影響

リークされた内部メモと「プロジェクト・シャロットピート」が示唆するものは、OpenAI内部で進行中の**組織戦略の転換と財務・提携面での路線修正**です。まず組織面では、前述のとおりメモ公開後に**社内の雰囲気**が「戦時モード」へ切り替わったとされます⁵。従来の「常に業界トップを走る」という前提を捨て、社員の間には危機感とともに現実直視のムードが生まれました。報道によれば、社内では**採用一時停止（ハイリングフリーズ）**の噂も流れ始めており、これまでの拡張路線から一転してコスト抑制と選択と集中を志向する段階に入ったといえます⁵。アルトマンCEO自身、「我々にはやるべき課題があるが、**急ピッチで追いついている**」とメモを結んでおり³⁷、社員に対して現実を共有しつつ士気を引き締める狙いが見て取れます。要は、OpenAIは内向きには**守備を固め長期戦に備える体制**へ移行し始めたのです。

資金面の課題もメモの中で赤裸々に語られていました。OpenAIは評価額こそ2025年時点で5,000億ドル規模に達していますが、その**年間売上は130億ドル程度**に過ぎず、巨額の計算インフラ投資やモデル開発コストによって大規模な赤字を計上しています³⁸。推計ではOpenAIは2024年から2030年にかけて総額6,500億ドル（約97兆円）もの計算資源予算を計画しており、2030年以降も継続する見込みだといえます³⁹。実際2025年時点で**年間80億ドルを焼きつつ、前年は50億ドルの純損失**を出しており、こうした赤字は投資家からの資金流入に依存して辛うじて維持されている状態です⁴⁰。アルトマン氏はこれまで「利益はトップ10の関心事ではない」と豪語してきましたが⁴¹、さすがに今回のメモでは「**経済的逆風**」に直面していると認めざるを得ませんでした¹。もし成長神話が崩れ、投資家が資金提供に二の足を踏めば、OpenAIという高速走行列車は燃料切れに陥りかねません⁴²。したがって同社には、**少なくとも2029年までに収益性を達成する（黒字化する）必要**があると指摘されています⁴³。これは、Microsoftなどクラウドパートナー企業とのインフラ投資契約上の要請でもあります⁴³。年間数十億ドル規模のデータセンター費用を将来も捻出し続けるには、今のうちにビジネスモデルを立て直し収支バランスへの道筋をつけることが急務なのです。

この危機感から、OpenAIは資金・インフラ面で**パートナーシップの見直しと多角化**に踏み切りました。特筆すべきは2025年1月になされた**Microsoftとの提携条件の再調整**です。従来、OpenAIのクラウド計算リソースはマイクロソフトAzureが独占提供する契約でしたが、2025年初頭にこの独占条項が緩和され、OpenAIは**初めてMicrosoft以外のクラウド（OracleやSoftBank系など）の計算資源も使える**ようになりました⁴⁴。⁴⁵。Microsoftは依然として新規GPUリソース購入の優先権を持ち、OpenAIのAPI提供に関する独占販売権も保持していますが⁴⁶、少なくともモデル訓練用の追加容量を他社データセンターで確保する道が開いたのです⁴⁷⁴⁸。このパートナーシップ再編の背景には、OpenAI主導で発表された「**Stargate（スターゲート）**」計画があります。これはOpenAI・ソフトバンク・Oracleなどが共同で2025年から4年間で5,000億ドル規模を投じ、米国内に最大10GW分の新たなAI特化型データセンター群を建設するという超大型プロジェクトです⁴⁷。2025年1月、ホワイトハウスでトランプ大統領（当時）が主要関係者を集めて発表したことで注目を集めました⁴⁷。MicrosoftはこのStargateには出資こそしないものの技術パートナーとして参画し、OpenAIが他クラウドと組むことを容認する代わりに、OpenAIのAPI販売や収益シェアに関する従来の優先権は2030年まで維持する形で折り合いがついたと報じられています⁴⁶⁴⁹。この動きによって、OpenAIは**より迅速に大規模GPUクラスターを使える環境**を手に入れました⁴⁵。実際テキサス州には既に最初のStargate拠点となるデータセンターが稼働しており、NVIDIAの最新GPU（GB200）を大量設置した施設がOpenAIのモデル訓練を支えているようです⁴⁴。

要するに「プロジェクト・シャロットピート」とそれに伴う“**Rough Times（困難な時代）**”モードは、OpenAIの社内構造から外部提携まで幅広く影響を及ぼしています。技術開発面ではシャロットピートを筆頭に**モデル基盤の刷新と研究プロセスの自動化**に社内リソースを振り向けるため、優先順位の見直しや人員再配置が進んでいるでしょう。組織運営面では一時的に成長を緩めてでも**財務の健全化と持続可能性確保**に舵を切り、無駄な採用やプロジェクトを抑制する動きが見られます⁵。資金・インフラ面ではMicrosoft一社頼みの体制を改め、**マルチパートナー戦略**で巨額の設備投資に挑むことで、今後求められる爆発的な計算需要にも対応しようとしています⁴⁴。幸いMicrosoft側も自社株主からの圧力等により独占を緩めざるを得な

かった事情があり⁵⁰⁴⁸、OpenAIは結果として計算資源確保の選択肢を広げることになりました。このように内部メモ流出を契機として表面化した危機は、OpenAIに**体制の引き締めと戦略的ピボット（方向転換）**を促し、その影響は組織・財務・提携のあらゆるレイヤーに及んでいると言えます。

5. 業界専門家の見解：一時的停滞か、構造的危機か？

今回の内部メモ流出について、AI業界の専門家やアナリストたちは様々な見解を示しています。大きく分けると、「**一時的な停滞に過ぎない**」という楽観的解釈と、「**構造的な危機の始まりだ**」という慎重な見方とに二極化しているようです。

楽観的な側では、OpenAIほどのトップ企業であっても競争環境の変化により一時的に成長が踊り場を迎えるのは不思議でない、との意見があります。彼らは今回の内部メモを「**次の飛躍に向けた助走期間**」と捉え、OpenAIが戦略を練り直すことで再加速する可能性を強調します。実際、同社には未だ圧倒的なブランド力とユーザーベースがあります。ChatGPTは2025年11月時点で週間アクティブユーザー数が7～8億人に達し、2月時点から倍増する勢いでした⁵¹。世界で5本指に入るトラフィックを抱えるプラットフォームへ成長したことはOpenAIの大きな資産です⁵¹。ただし裏を返せば、この巨大全体ユーザーのうち**課金ユーザーは4～10%程度しかいない**ことも事実で⁵¹、ここの転換率を上げられれば収益拡大の余地はまだあるとも言えます。アルトマン氏自身も社内メモの中で「**我々には課題があるが、追いつきつつある**」と述べ³⁷、短期的逆風は認めつつも**長期的成長への自信**を示しています。またAI業界全体を見渡せば、OpenAIとてまだ「勝ち組」の一角であり、仮に成長鈍化とはいえ依然多額の資金調達力と最高水準の研究チームを擁しています。したがって「**一時の停滞**」に過ぎず、適切な戦略ピボットが功を奏すれば再び伸び始めるだろうという見方です。

一方、慎重・悲観的な側からは、今回のメモが**AIバブル崩壊の前兆**ではないかとの声も上がっています。OpenAIは評価額5,000億ドルに達する一方で利益は出しておらず、「AI革命」を背景にした投資家の期待で成り立つバリュエーションにはかねてより疑問が呈されてきました⁵²。今回アルトマンCEO自らが経済的逆風を認めたことで、その**危うい綱渡り状態が露呈した**との指摘です⁵³。実際、Morgan Stanleyのリサ・シャレット氏らアナリストは「ハイパースケーラー各社のデータセンター資本支出は4倍に跳ね上がり年4,000億ドルに迫るが、それに見合う収益が伴っていない」と警鐘を鳴らしており⁵⁴、生成AIブームに対するマーケットの期待と現実のROIとのギャップを懸念しています。事実、**生成AIを導入した企業の95%は明確なリターンを得られていない**との調査結果もあり、2025年11月にはそれを受けてハイテク株が急落（NVIDIA株-3.5%、Palantir株-10%など）する場面もありました⁵⁵。このように「**ブームはしただけではないか**」という空気が広がり始めており、OpenAIの躓きは単なる一企業の問題ではなく**業界全体の過熱感の是正**だと見る向きもあります⁵⁶。

加えて、OpenAIの場合は事業モデル上の弱点も指摘されています。同社はChatGPTという驚異のプロダクトでユーザーを集めましたが、そのmonet化（収益化）には苦戦が見られます。前述のように莫大なユーザー数に対し、有料課金転換率は数%に留まります⁵¹。また収益の約70%はAPI提供や企業向け契約から得ていますが⁵⁷、上で触れたようにGoogleやAnthropicといった競合によって「**同等かそれ以上に高性能な代替**」が市場に増えてくれば、**企業顧客がOpenAI製品に固執する理由も薄れ、価格競争で収益が圧迫される可能性**があります⁵⁸。実際、GoogleのGemini 3登場以降、ChatGPTの法人契約数が頭打ちになったとの報道もあります（SalesforceがGPT活用パイロットを縮小するなど⁵⁹）。OpenAIが直面するのは単なる一時的な売上減ではなく、「**収益モデルの持続性**」という根本問題ではないか、というのが悲観派の論点です。Xpertの分析記事も、技術停滞・財務綱渡り・競争激化が相まって「**OpenAIの未来だけでなくAI業界全体の構造を再定義しかねない有害な組み合わせ**」を生んでいると警告しています⁶⁰。このままでは投資家の信頼も揺らぎ、資金調達のロジック自体が崩壊しかねない——そんな**構造的危機**が始まっているのではないか、という見方です⁴⁰。

現時点で業界の見解は定まっておらず、「OpenAIは一服後に再加速する」というシナリオと「このまま低迷・失速していく」というシナリオがせめぎ合っています。いずれにせよ、今回の内部メモ流出が**OpenAIの**

無敵神話に一石を投じたことは確かでしょう。わずか数ヶ月前まで絶対的と見られたリーダー企業の脆弱性が露呈したことで、AI競争の行方は一段と不透明になりました。今後半年～1年の動向次第で、今回の逆風が一過性のものだったのか、それともAI業界の潮目が変わる転換点だったのかが明らかになっていくはずです。

6. 情報の信憑性と戦略的ピボットの行方

最後に、今回の報道内容の信憑性と、実際にOpenAIが進めつつある戦略的ピボット（方向転換）について整理します。まず情報源の信頼性ですが、この内部メモはテクノロジー系有力媒体「The Information」に社内情報筋が提供したものであり⁶¹、同誌の11月20日付記事「Altman Memo Forecasts 'Rough Vibes'...」として公開されました⁶²。その後、タイムズ・オブ・インディアやエコノミック・タイムズ、Futurismなど世界各国のメディアがこの内容を報じており²、日本語圏でも中央日報日本語版やYahoo!ニュースなどが報道しています³。現時点でOpenAI側から公式な否定は出ておらず、内容の整合性から見てもリーク情報は概ね事実と考えてよいでしょう。

実際、内部メモに書かれていたとされる事柄と同時期のOpenAIの動きは符合しています。例えばメモで触れられたMicrosoftとの提携見直しについては、2025年1月に**独占クラウド契約の一部解除とStargate計画への参加**が公式発表されています⁴⁴。Microsoftは自社ブログで「OpenAIが追加の容量構築を行うことを承認した」と述べ、OpenAIがOracleやSoftBankと進める5000億ドル規模のデータセンター計画に理解を示しました⁴⁷⁴⁸。同時に「OpenAIのAPI独占提供権や収益シェアといった提携の核心要素は2030年まで維持される」とも明言し⁴⁶、独占契約を柔軟化しつつも**基幹ビジネスでの協業関係は続く**旨を強調しています。これは内部メモで示唆された「Microsoft依存度を下げつつ、新モデル訓練に必要な計算リソースの迅速な確保を目指す」という戦略そのものでしょう⁴⁴。さらに、OpenAIは2025年に入ってから**ソフトバンクや他企業からの大型出資の噂**も報じられており、資金調達面でも多様な出資元を模索する姿勢がうかがえます。こうした公式発表・報道は、内部メモの内容が単なる憶測ではなく**実際に進行中の戦略ピボットを反映したものである**ことを裏付けています。

技術戦略の面でも、OpenAIは近年いくつかの**路線変更**を打ち出しています。前述のとおり、ChatGPT向けには「GPT-4.5」「GPT-5」ではなく**o1、o2、o3**といった推論重視モデルが次々投入されました¹²。2025年4月公開の公式ブログ記事「Introducing OpenAI o3 and o4-mini」では、これらoシリーズが**従来モデルより長い思考時間やツール使用を通じて高度な推論を実現する**新戦略の産物であると説明されています¹²。この方向性は、内部メモで言及された「Shallotpeat（シャロットピート）」プロジェクトとも軌を一にするものです。すなわちOpenAIは、スケーリング則の限界に直面した中で**モデルの知的プロセスを深める**アプローチに活路を見出そうとしており、その成果を順次外部にも提供し始めているのです。

また、OpenAIは**長期的ビジョン**として真の汎用人工知能（AGI）を見据えたプロジェクトにも言及しています。アルトマン氏のメモでは「研究チームの大部分を**超知能（スーパーインテリジェンス）達成に集中させることが極めて重要**」と強調されていたといいます⁶³。これは、短期の商業的成功よりも将来的な飛躍（真に画期的なAIの創出）に注力するという決意表明です。実際、OpenAIはかねてより「将来的にAGIがもたらす影響に備える」と公言しており、2023年にはその一環として**人類に役立つ安全なAGI開発のための方針**

（OpenAI Charter）を改訂したりもしています。2023年末にはジョニー・アイブ氏（元Appleのデザイン責任者）やソフトバンクとの協業で**AI搭載の新デバイス構想**が報じられるなど、ハードウェアを含めた新領域への進出もうかがわせました⁶⁴⁶⁵。これらは内部メモに直接は書かれていないものの、「ChatGPTを全てのユーザーのパーソナルOSにする」「2026年までに物理デバイスを届ける」といった**OpenAIの包括的戦略**がリークした別資料から判明しています⁶⁴⁶⁶。要するに、OpenAIは**ソフト・ハード両面でプラットフォーム化を目指す大胆な路線**を内々で進めており、今回の社内メモはその途上で直面した課題（技術停滞・競争激化）にどう対応するかを率直に示したものであると言えるでしょう。

以上を総合すると、今回の内部メモ流出の情報は高い信憑性を持ち、その内容はOpenAIが実際に遂行中または計画中の戦略変更と一致しています。メモは危機的側面ばかりクローズアップされましたが、裏を返せばOpenAI経営陣が**現状を正確に分析し、次の一手を打とうとしている**証左でもあります。「シャロットピー

ト」や「Rough Times」という言葉に象徴されるように、OpenAIは自らの弱点を認めた上で大胆なピボットに踏み切りました。その成否はまだ不確定ですが、仮にこれが成功すれば技術的停滞を打破し、持続可能な成長モデルを獲得する転機となるでしょう。逆に失敗すれば、同社のみならずAI業界全体の熱狂に冷水を浴びせる結果となりかねません。今はまさに岐路に立っているOpenAI——今回の内部メモは、そのドラマの舞台裏を示す貴重な手掛かりであり、AI史における一つの転換点を記録するものとして注目されます。 60 40

Sources:

- 【3】 Markus Kasanmascheff, WinBuzzer: “Leaked Memo: Sam Altman Sees ‘Rough Vibes’ and Economic Headwinds at OpenAI” (Nov. 21, 2025) 5 29
- 【4】 Markus Kasanmascheff, WinBuzzer: Ibid. 41 54
- 【7】 Konrad Wolfenstein, Xpert.Digital: 「プロジェクト「シャロットピート」と「ラフ・タイムズ」：サム・アルトマンの内部メモがOpenAI最大の危機を明らかにする」 (公開日: 2025年11月22日) 52 19
- 【14】 中央日報日本語版: 「アルトマンCEO、AI競争の困難を吐露…『OpenAI、一時的に逆風もある』」 (2025年11月22日) 67 68
- 【15】 Konrad Wolfenstein, Xpert.Digital: 同記事内 33 26
- 【20】 OpenAI公式ブログ: Introducing OpenAI o3 and o4-mini (April 16, 2025) 12 69
- 【22】 Konrad Wolfenstein, Xpert.Digital: 同記事内 19 70
- 【24】 Stephen Nellis & Krystal Hu, Reuters: “Microsoft relaxes data center grip on OpenAI amid \$500 bln joint venture” (Jan. 22, 2025) 47 46
- 【25】 Konrad Wolfenstein, Xpert.Digital: 同記事内 43 39
- 【26】 Konrad Wolfenstein, Xpert.Digital: 同記事内 61 71
- 【28】 Konrad Wolfenstein, Xpert.Digital: 同記事内 6
- 【29】 中央日報日本語版: 同記事内 3 4
- 【31】 Konrad Wolfenstein, Xpert.Digital: 同記事内 11 72

1 2 6 7 8 9 10 11 13 14 15 16 17 18 19 21 22 24 25 26 27 28 31 32 33 34 38 39 40 42 43 44 45 51 52

プロジェクト・シャロットピートと 困難な時代: サム・アルトマンの内部メモが OpenAI 最大の危機を明らかにする

<https://xpert.digital/ja/>

%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%82%AF%E3%83%88%E3%83%BB%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%AD%E3%83%83%

3 4 23 56 67 68 アルトマンCEO、AI競争の困難を吐露…「OpenAI、一時的に逆風もある」 | Joongang Ilbo | 中央日報

<https://s.japanese.joins.com/JArticle/341326>

5 20 29 30 35 36 37 41 54 59 63 Leaked Memo: Sam Altman Sees 'Rough Vibes' and Economic Headwinds at OpenAI - WinBuzzer

<https://winbuzzer.com/2025/11/21/leaked-memo-sam-altman-admits-to-rough-vibes-and-economic-headwinds-at-openai-xcxwbn/>

12 69 Introducing OpenAI o3 and o4-mini | OpenAI

<https://openai.com/index/introducing-o3-and-o4-mini/>

46 47 48 49 Microsoft relaxes data center grip on OpenAI amid \$500 bln joint venture | Reuters

<https://www.reuters.com/technology/microsoft-relaxes-data-center-grip-openai-amid-500-bln-joint-venture-2025-01-22/>

50 Microsoft is no longer OpenAI's exclusive cloud provider - TechCrunch

<https://techcrunch.com/2025/01/21/microsoft-is-no-longer-openais-exclusive-cloud-provider/>

64 65 66 The leaked OpenAI memo

<https://strategybreakdowns.com/p/openai-memo>